

に、信仰を告白して、自分の生涯を主のものとする出来事に立ち会うのは、厳粛な感動をもたらしめます。教会というのはこういう信仰を重ねてきたのだと思わされます。洗礼を受けることで、自分に注がれていた神様のまなざしと慈しみを知ることになります。

詩編八編は「あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう」と語ります。そして「あなたが顧みてくださるとは。」と神を讃えます。

「人は何ものか」というと答えのない、人の空しさを問う問いに見えます。人間の悲惨な現実、悪と罪、世界の矛盾が問われます。しかし、詩人は「人は何ものか」とこれを問うことが、深い喜びになっています。なぜこのような人間に神が目を留めてくださるのか、心に留めてくださるのか。人の思いを越えて、「あなた」として主が御心に留め、顧みてくださる。不思議なことです。しかしそこに信頼があるのです。

それが分かるのは、むしろ幼子のようなものです。人に先んじることなく、弱く世話になり守られるほかにないのですが、疑いを知らず屈託のないものです。そこに信仰者の理想を見えています。そしてこれは誰にでも与えられるものです。

この詩は礼拝の祈りとして歌われました。それは、神が顧みてくださると驚く幼い心を持つたものが一人ではないことを示します。

小さく弱く「しんがりの神」を頼る幼い心で礼拝をするところに、同じ思いで賛美し礼拝するものが集められている。こういうところに礼拝の豊かさがあります。静かな力を受けます。この恵みの内に新たな歩みを踏み出しましょう。

(二月一六日特別伝道礼拝)